

西脇順三郎先生の講演「ワイルドの機知」について

伊 藤 勲
(東京成徳短大助教授)

1994年という年は、西脇順三郎先生生誕百年であると同時に、先生が自らペイターに始まりペイターに終わったと、その深甚な影響を披瀝されたウォルター・ペイターの没後百年という、まことに記念すべき年であった。西脇先生は昭和51年12月4日、明治大学(神田駿河台)で開催されたワイルド大会で、「ワイルドの機知」と題して講演された。この講演は、西脇先生がワイルドに対してアンビヴァレントな感情を見せておられるのが興味深い。それはワイルドの文学的天才に対する畏敬と、彼の気取りに対する嫌悪である。しかしこの気取りは西脇先生も持っておられた一面でもある。

工藤好美先生は早くも大正14年、岩波の雑誌『思想』6月号に発表された「オスカ・ワイルド」論の中で、「仮面はそのあまりに長い慣用のために、すでに肉の一部、彼の肉體の急所になっていた。彼は彼の仮面を剥ぎとることによって、彼の生活、彼の藝術のよって立つ第一原理を破壊した」と書いて、ワイルドの生活と芸術における仮面性を指摘された。ワイルドにとって、仮面とは芸術における虚構性の重視と一体を成すものであり、自己の中に他者を作り出すという自己を客体化する行為であった。これは、アルター・エゴ即ちもう一人の自分を持つという方法をその芸術の根幹としている、ワイルドの最大の師ペイターに由来する考え方である。

ペイターは対象を自己を写す鏡にした。彼は研ぎ澄ました感覚で対象を緻密に観察し、自己と対象との関係を測ることによって自己を認識した。自己を魅了するその対象は自分にとって何であるかという問いを常に発することによって、目の前にあるものが自分を写す鏡になるのである。『ドリアン・グレイ』におけるドリアンの肖像画が現実のドリアンの内面の姿を写す鏡になっているというところに、ペイターのこの方法が明らかにワイルドに継承されているのを認めることができる。客体化された自己が自分であって自分でない、或いは逆に、自分ではないのに自分であるというのが、仮面というものの本質であり、ワイルドの気取りもこのような仮面の一面を示すものである。この逆説的な仮面は、ペイターを師とする西脇先生にもやはりあったものであり、同じ人を師と仰ぐ西脇先生とワイルドの両者の必然的な結果である。

西脇先生は近代人の顔をして物質主義を標榜されたが、実は近代科学的合理主義における還元主義的な物質主義ではなく、ペイターと同じくアニマ・ムンディというあの古い夢

に支えられた有機体論的な物質主義であった。ここに西脇先生の仮面があり気取りがあった。

しかし西脇先生が徒らなる気取りを嫌われたのは、彼の家庭環境によって育まれた礼節と誠実と謙虚な人柄のなせるわざであると思われる。

「ワイルドの機知」(要旨)

ワイルドは非常に軽薄な男と言われたかと思えば、一方ではすばらしい才能の持ち主だとも称讃され、どっちとも言えないような人であったが、昔は悪い方、即ち術学ということで大抵の評価がなされてきた。しかし年経るにつれて、世界にない類い稀な機知の持ち主だと評価されるようになってきた。もしワイルドが16世紀に生まれていたら、ワイルドみたいな人がシェイクスピアでなかったかと思うほど、ウィットこそワイルドの真価である。彼は本国ではさほど評価されなかったが、外国では評価が高く、シェイクスピアと並んで、ワイルドほどフランスやドイツなどの外国に影響を及ぼした人はいない。

ワイルドは確かに見せかけ屋である。オックスフォード大学の時に、絵などろくすっぽ描くことなどできないのに、自分の部屋でイーゼルの上に何も描いてないキャンパスを立てて、「今これから描きます。考え中である」と言い、更に、ウォルター・ペイターの弟子になるのだということで、「将来、俺は美術の先生、美学の先生になる。そのために勉強するのだ」とか何とかなって、誇大妄想狂的なことを非常によくやった。行為としては事実そういうところがあったから困る。私自身そういうところは最も嫌うところである。ところが文章の面から見ると、そんなことは吹き飛ばしてしまうようなすばらしいところを持っている。そこが彼の不思議なところである。こういう存在はちょっとない。ちょっと頭が変、どうかしているということは確かである。

ワイルドは新しい美の問題を考えた。彼は唯美主義運動などというものはないのに、その大将であるかのようなことをわざわざやった。ヨーロッパにあったのは、ボードレールのような芸術のための芸術である。芸術ということについては、シェリングを初めとして、ドイツが先に論じ、ドイツでもそういうものがあつた。しかしワイルドが芸術という言葉の宣伝屋になり、新しい芸術論を取り入れたことは確かである。

彼は自然はポーズにすぎないと言ったが、これは何を意味するのか。自然を重んじたフランスの古典主義に対して、ボードレールと同じように、超自然の重要性を主張したのである。つまり、自然であるということは、ポーズに必要なことであり、そういうものは駄目だと言ったのである。どう考えても造花より、野に咲く花、自然の方がきれいであるが、超自然、習慣を離れることによって人を驚かすことが芸術では大事である。自然はポーズにすぎないと言うこと自体、ポーズなのであるが、簡単にこう言って切り捨てられないの

も、ワイルドはこのポーズ的な言い方によって驚かそうとしたからである。

ワイルドはあらゆることでポーズであるが、論文となるとそれが非常にすばらしい。このポーズが本当のように見える。ワイルドは非常におもしろい。彼にはかなわない。あの人は平然として、笑わないで笑わせる。すばらしいコメディアンである。それは安っぽい軽薄さと紙一重であるだけに、本当にいいところがなかなかはっきりと出て来ない。この頃ようやく私にもわかるようになってきた。

『社会主義の下における人間の魂』もよく計算された論文で、そのアイデアがすばらしい。それのみか、英語も最高のものである。インディヴィジュアリズムとソウシャリズムは一見相反するもののように見えるが、社会主義を通ることによって、インディヴィジュアリズムが成熟する。人間も芸術もこのインディヴィジュアリズムに到達しなくてはいけない。ギリシアでは汝自身を知れと言ったが、キリストは汝自身になれと言った。それは物欲を捨てよということであり、芸術も物欲を捨てなければいいものは生まれえない。物欲を捨てて自分自身になる。これが人間として最高のことだと、ワイルドはキリストの言葉を敷衍しているのである。インパーソナリティがいいと言ったエリオットとは逆に、キリストに倣ってパーソナリティを重んじたのである。「私」の中にある人間のパーソナリティには、すばらしく神秘的なものがある。人間はそれに従い、それになるように努力せよというのが、キリストの教えであると言って、ワイルドはクリスチャンズムに戻っている。この論文は短い、ワイルドの頭が生んだ最高の論文である。

彼の詩などは、古臭くて全然駄目である。ワイルドは飛び切りギリシア語ができて、トリニティ・コロッチで金メダルをもらった。ギリシア語ができたからオックスフォード大学に入ることができた。そしてそこでの何か歯に浮くような詩は、本当によくできた人まねである。それをみんなすば抜いている人がいる。

私はこういう気取りは大嫌いだから、ワイルドを全面的に褒めること、或いは尊敬することはできない。頭がいいことを尊敬するというのも変だが、その人の持ち前だから、それだけでただそのまま受け止めると言えばそれでいいのだけれど、やはり偉いものだと感心するところはある。

それにしても非常に目立ったこと、人のやらなかったことを平気でやるなどということは、どういうことであろうか。ビロードの上着を着、大きなひまわりをボタン・ホールに差してピカデリー・サーカスを歩いたというのは有名な話だが、今頃になってこれはキリスト教の精神だと言ってみたり、すぐカトリックになってみたりした男だから、人のやらなかったことを平気でやることなど、何でもなかったのだらう。ビロードの悪いコール天みたいな服は、大抵芸術家の着るものである。ワイルドがビロードの上着を着て歩いたということは、芸術家気取りのためだったのではないかと思われる。だからそれを着たのはそんなに大した深い意味があるわけではない。

クリスチャンらしいことを今までしてこないで、「俺はクリスチャン、キリストは僕の分を言ったんだ」とか何とか言って、すっかりクリスチャンになるということは、頭のいい証拠ということでもあり、シェイクスピアは4千人の心を持つと言うが、ワイルドも人の心がよくわかっている。何でもよく知っているということで、シェイクスピアとワイルドはよく似ている。

ワイルドとギリシア語というのは本当に面白い組み合わせだった。文芸はやはり根本は思想である。ワイルドはギリシア語ができ、ギリシア思想を知り、ヨーロッパ思想に通じていた。

(文責・伊藤)

